



〈連載(211)〉

明石海峡のたこフェリーに乗船



大阪府立大学大学院・海洋システム工学分野・教授
池田 良穂

フェリーの原点は、短距離の「渡し舟」だが、いつの間にか長距離フェリーのように300kmを越える航路に就航するフェリーも現われた。現在では、「フェリー」は比較的短距離の定期航路に就航する旅客船の意味に使われており、「比較的短距離」の意味は大西洋や太平洋などの大洋の横断ではないというようにとられているようだ。この中でも短距離航路のフェリーは、橋やトンネルの開通によって、閉鎖に追い込まれたり、減便を余儀なくされたりするのが常だ。しかし、そうした中でも果敢に橋やトンネルと戦っている健気なフェリーに出会うと嬉しくなる。

本連載の202回目、瀬戸内海の大島と今治を結ぶ協和汽船の2隻のフェリーを紹介したが、それ以来、こうした橋と戦うフェリーにできるだけ乗船するように心がけている。

この正月休みには、「おれんじ8」の明石海峡通過する姿を撮影するために淡路島の岩屋に出かけた。堺の自宅を車で出て、一路、明石に向った。明石の港からは、今でも、カーフェリーと高速船が明石海峡横

断航路に就航している。このうちカーフェリー航路は、かつては道路公団が運営していたカーフェリーとしては歴史のある航路で、民営化されて、今では「たこフェリー」の愛称で親しまれている。運航するのは明石淡路フェリーで、24時間、ほぼ30分おきに出港している。船は、約1200総トンの「あさかぜ丸」、「あさしお丸」、「あさなぎ丸」の3隻でこの中の1隻「あさしお丸」には、ユニークな「蛸」のイラストが描かれている。この蛸は、もちろん有名な「明石蛸」から来たもの。明石漁港には、蛸漁の漁船がたくさん繋がれており、高速船乗り場の近くには蛸料理専門の料亭がいくつか並んでいる。

こうした本格的な蛸料理だけでなく、「明石焼き」というたこ焼きの一種も有名だ。大阪のたこ焼きとは全く違って、蛸の入った卵焼きで、たれで食べるのだが、なかなか美味しい。明石について、まずは、たこフェリーに乗る前に名物の蛸料理に舌鼓を打った。

明石漁港内の漁船を見て回るのも楽しい。明石の港口には、古い灯台が建ってお

り、その近くで出入りする高速客船、カーフェリー、漁船の姿を撮影する。淡路ジェノバ・ラインが2隻の高速船「まりんふらわあ2」と「レットスター2」で岩屋との間を13分で結んでいる。彼女たちも、明石海峡大橋に果敢に挑む戦士たちである。今回は、車で来ていたので、残念ながら、高速旅客船には乗ることができない。

明岩フェリーの乗り場に到着すると入口に発券所があり、岩屋まで2050円を支払う。これで乗用車とドライバーの料金だ。橋を渡るより若干は安い。その上、雄大な橋を海上から眺めながらの明石海峡クルージングを楽しめるのだから、なかなか優雅なもの。次々に車がやってきて、やがて駐車場に列がいくつもできた。フェリーが到着して、乗客と車が下りると、駐車場に並んでいた車が次々と車両甲板にと吸い込まれていく。乗用車換算で54台を積載することができる。最後に数台が残され、これらの車は次の便を待つことになる。自宅を出る前にインターネットで調べると、「正月の帰省客の車で混むことが予想され、数便待ちの可能性も」、との表示があったが、心配するほどではなかった。

車両甲板から船内キャビンに入る。見晴らしがよく、売店もフル稼働だ。各テーブルには、オリジナルグッズ、お土産、軽食・飲み物などの案内が置かれており、しかも手作り。橋と勝負する上では、船上の快適性はなくてはならない要素であり、それを従業員挙げて手作りで実践に移している様子がひしひしと伝わってくる。

船の写真撮影を趣味とする人間にとっては、明石海峡を通過する船との出会いが嬉

しい。タンカー、貨物船、そして、こちらにも橋と果敢に戦うジャンボフェリーの姿をカメラに収めることができた。ジャンボフェリーは神戸と高松を結ぶ航路に就航しているが、明石海峡大橋が開通したために就航船が半減した。すなわち、ジャンボフェリーの船もまた、橋と果敢に戦っている。



明石海峡大橋下を通過する「あさしお丸」



明石海峡を通過する「おれんじ8」

岩屋の港から、橋のたもとにある道の駅「あわじ松帆アンカレイジパーク」に車を止めて、海峡を通過する船の姿を追った。もちろん、この日の最大の目的は、先にも述べたように、四国開発フェリーの「おれんじ8」の撮影。そのためには、この道の駅の広場が絶好の撮影ポイントだ。13時に大阪南港を出港した彼女は、14時半頃に明石海峡を通過して行った。

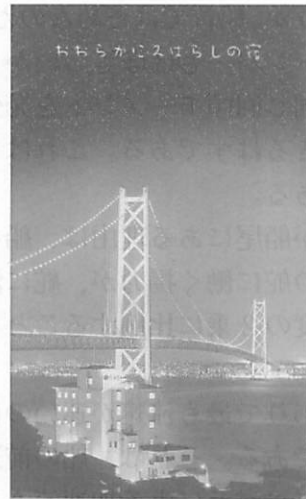
この道の駅の近くに、温泉宿「淡海荘」がある。ここは、宿泊者以外も温泉に浸ることができるので、その露天風呂からは明石海峡を通過する船が一望にできるという絶好のロケーション。温泉に浸かりながら、好きな船が眺められるのだから「極楽」そのもの。ゆっくり泊って、一日、船三昧というのも魅力的だ。

帰りも、たこフェリーを利用して明石に戻り、途中、神戸の元町商店街に寄った。この商店街にある海文堂書店は、海事書の品揃えでは右に出る店は全国どこにもないというほど、海事関係者には有名な書店だ。海事書の担当者に新年の挨拶をすると、「先生のブルーボックス「図解船の科学」は売れ行き絶好調ですよ」との嬉しい言葉。



あさかぜ丸

ちょっと嬉しくなって近くの中華街で豪勢な夕食を奮発してから、湾岸線を通って堺の自宅に戻った。



淡海荘



まりーんふらわあ2

